

## エルニーニョ監視速報 ( No. 192 )

太平洋赤道域の海水温等の 2008 年 8 月の状況、及びエルニーニョ監視海域(北緯 5 度～南緯 5 度、西経 150 度～西経 90 度)の海面水温の今後の見通し(2008 年 9 月～2009 年 3 月)は、以下の通りである。

- 太平洋赤道域の海面水温は、西部と東部で正偏差が見られ、中部では負偏差が持続した。海洋表層(海面から深度数百 m までの領域)の水温は、西部と東部で正偏差、中部で負偏差だった。
- エルニーニョ監視海域の海面水温は、今後基準値に近い値で推移すると予測される。今後冬にかけてエルニーニョ現象あるいはラニーニャ現象が発生する可能性は低い。

### 【解説】

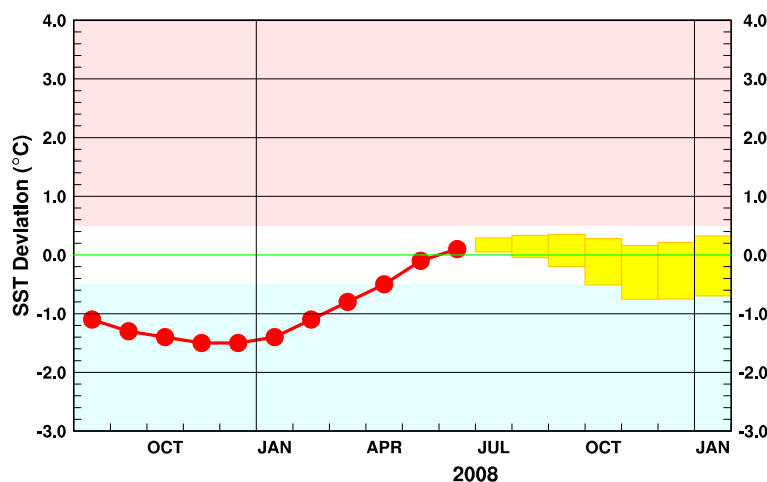
8 月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $+0.6^{\circ}\text{C}$  で、6 月の 5 か月移動平均値は  $+0.1^{\circ}\text{C}$  だった(図 1、表)。8 月の太平洋赤道域の海面水温は、西部と東部で正偏差が見られ、中部では負偏差が持続した(図 2、図 4)。海洋表層の水温では、西部と東部で正偏差が見られ、中部で負偏差が見られた(図 3、図 5)。太平洋赤道域では、日付変更線付近の対流活動が平年より不活発で、西部から中部にかけての気圧下層では 8 月を通じて東風偏差が見られた(図 6、図 7、図 8)。

エルニーニョ監視海域の海面水温は基準値よりやや高いものの、太平洋赤道域における表層水温や大気の循環には、中部から東部にかけての海面水温偏差をさらに増大させる兆候は見られない。

エルニーニョ予測モデルは、エルニーニョ監視海域の海面水温が、予測期間中、基準値に近い値で推移すると予測している(図 9)。

以上のことから、エルニーニョ監視海域の海面水温は、今後基準値に近い値で推移すると予測される。今後冬にかけてエルニーニョ現象あるいはラニーニャ現象が発生する可能性は低い。

エルニーニョ予測モデルによるエルニーニョ監視海域の海面水温予測(5 か月移動平均)



この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の 5 か月移動平均値の 6 月までの推移(折れ線グラフ)とエルニーニョ予測モデルから得られたその後の予測(ボックス)を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差の 5 か月移動平均値が 70%の確率で入る範囲を示す。(基準値はその年の前年までの 30 年間の各月の平均値)

## 【監視・予測資料】

### 2008年8月における赤道域の海洋と大気の状態

#### 1. エルニーニョ監視指数(表、図1)

- エルニーニョ監視海域(北緯5度~南緯5度、西経150度~西経90度)の8月の海面水温の基準値(前年までの30年間の平均値)との差は $+0.6^{\circ}\text{C}$ だった。6月の海面水温の基準値との差の5か月移動平均値は $+0.1^{\circ}\text{C}$ だった(表、図1)。
- 8月の南方振動指数は $+1.0$ だった(表、図1)。

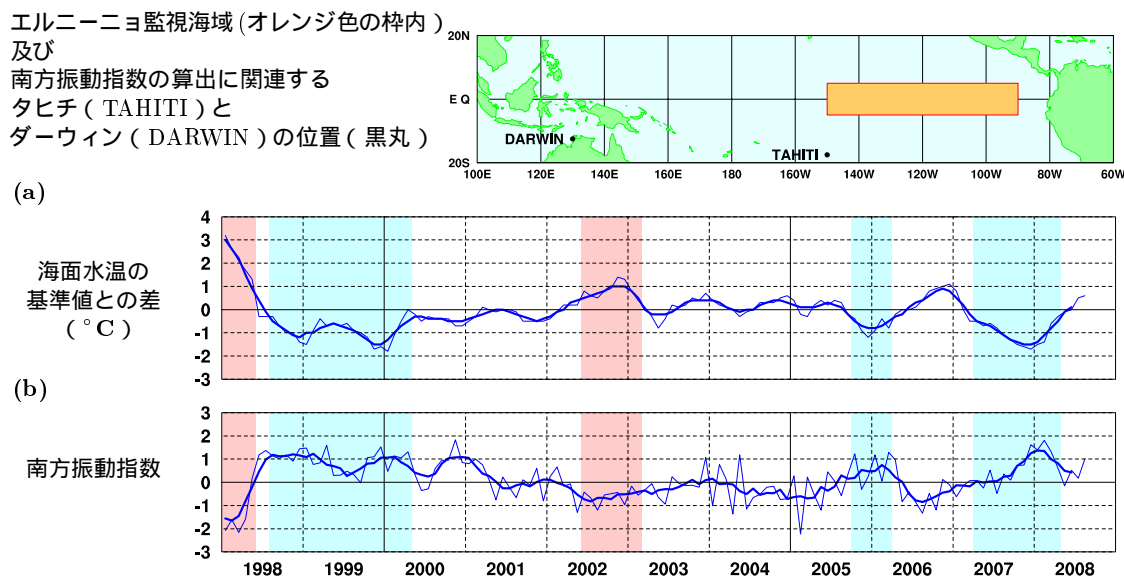


図1 エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差(°C)(a)と南方振動指数(b)の推移(1998年1月~2008年8月)。折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示す(海面水温の基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値、南方振動指数の年平均値は1971~2000年の30年平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

表 エルニーニョ監視指数

	2007年				2008年							
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
月平均海面水温(°C)	23.7	23.5	23.5	23.6	24.2	25.0	26.5	27.1	27.0	26.5	26.1	25.6
基準値との差(°C)	-1.3	-1.5	-1.6	-1.7	-1.5	-1.4	-0.6	-0.3	-0.1	0.0	+0.5	+0.6
5か月移動平均(°C)	-1.3	-1.4	-1.5	-1.5	-1.4	-1.1	-0.8	-0.5	-0.1	+0.1		
南方振動指数	+0.1	+0.7	+0.8	+1.6	+1.4	+1.8	+1.3	+0.6	-0.2	+0.5	+0.2	+1.0

5か月移動平均値の下線部は $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった月を、斜字体は $-0.5^{\circ}\text{C}$ 以下となった月を示す。

海面水温の最新月は速報値である。南方振動指数の!印は速報値であることを示す。

エルニーニョ/ラニーニャ現象: 気象庁では、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の5か月移動平均値が6か月以上続けて $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった場合をエルニーニョ現象、6か月以上続けて $-0.5^{\circ}\text{C}$ 以下となった場合をラニーニャ現象としている。なお、本監視速報では、上記の5か月移動平均値が $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった場合に「エルニーニョ現象が発生」、 $-0.5^{\circ}\text{C}$ 以下となった場合に「ラニーニャ現象が発生」と表現する。  
南方振動指数: タヒチとダーウィンの地上気圧の差を指数化したもので、貿易風の強さの目安の一つであり、正(負)の値は貿易風が強い(弱い)ことを表している。

## 2. 海面水温 ( 図 2、図 4 )

太平洋赤道域の西部と東部で正偏差、中部では負偏差が持続

- 8月の太平洋赤道域の海面水温は、東経 175 度から西経 165 度にかけて平年より  $0.5^{\circ}\text{C}$  以上低かった。一方、東経 135 度から東経 145 度にかけてと西経 125 度以東では  $+0.5^{\circ}\text{C}$  以上の正偏差が見られ、西経 110 度から西経 85 度にかけては  $+1^{\circ}\text{C}$  以上の正偏差が見られた ( 図 2 )
- 太平洋の赤道に沿った海面水温平年偏差の経度 - 時間断面図によると、7月から8月にかけて、 $-0.5^{\circ}\text{C}$  以下の負偏差が日付変更線から西経 160 度にかけて見られた。一方、7月末に西経 130 度から西経 85 度にかけて見られた  $+0.5^{\circ}\text{C}$  以上の正偏差は、8月下旬には西経 110 度から西経 85 度にかけて見られ、8月中旬には西経 100 度付近で  $+2^{\circ}\text{C}$  以上の正偏差が見られた。また、7月下旬に東経 145 度以西に現れた  $+0.5^{\circ}\text{C}$  以上の正偏差は、8月下旬には東経 140 度から東経 155 度にかけて見られた ( 図 4 )

## 3. 表層水温 ( 図 3、図 5 )

西部と東部で正偏差、中部で負偏差

- 8月の太平洋の赤道に沿った表層 ( 海面から深度数百 m までの領域 ) 水温は、西経 165 度から西経 125 度にかけての深度 70m から 200m で平年より  $1^{\circ}\text{C}$  以上低かった。一方、東経 140 度から東経 175 度にかけての深度 90m から 190m と、西経 115 度から西経 80 度にかけての海面から深度 70m では  $+1^{\circ}\text{C}$  以上の正偏差が見られた ( 図 3 )
- 太平洋の赤道に沿った海面から深度 300m までの平均水温平年偏差の経度 - 時間断面図によると、8月上旬の西経 160 度付近および 8月下旬の西経 150 度付近に  $-1^{\circ}\text{C}$  以下の負偏差が見られた。西部では7月以降弱い正偏差が持続し、東部では7月から8月にかけて正偏差が弱まった ( 図 5 )

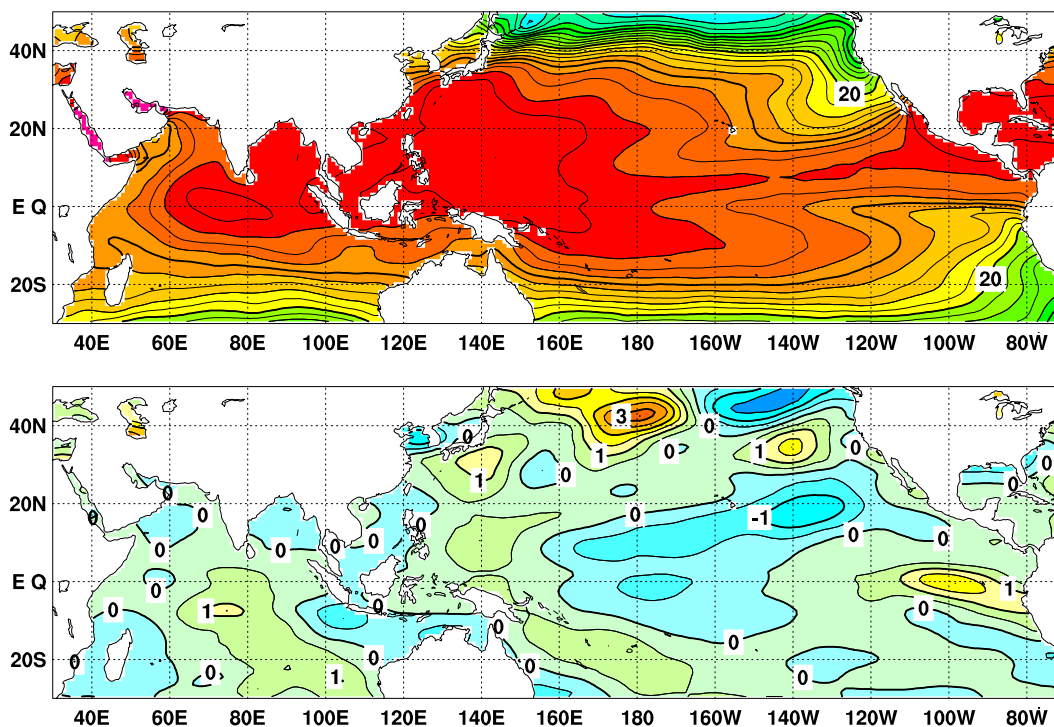


図 2 2008 年 8 月の海面水温図 ( 上 ) 及び平年偏差図 ( 下 )、海面水温図の太線は  $5^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎の、平年偏差図の太線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $0.5^{\circ}\text{C}$  毎の等値線を示す ( 平年値は 1971 ~ 2000 年の 30 年平均値 )。

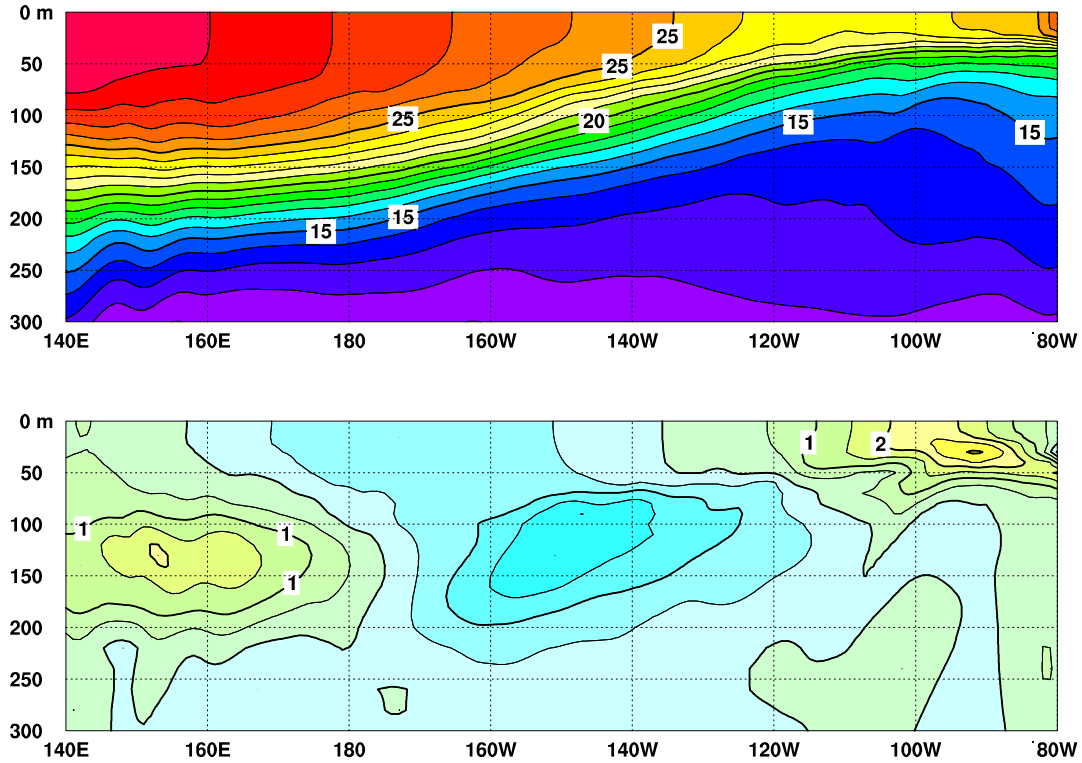


図3 2008年8月の太平洋の赤道に沿った水温(上)及び平年偏差(下)の断面図(海洋データ同化システムによる)。上図の等値線間隔は $1^{\circ}\text{C}$ 、下図の等値線間隔は $0.5^{\circ}\text{C}$ (平年値は1979~2004年の26年平均値)。

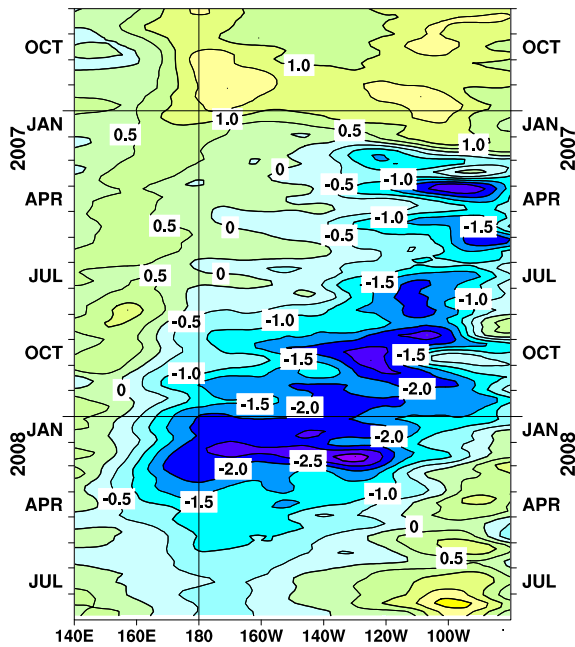


図4 太平洋の赤道に沿った海面水温平年偏差の経度-時間断面図。等値線の間隔は $0.5^{\circ}\text{C}$ (平年値は1971~2000年の30年平均値)。

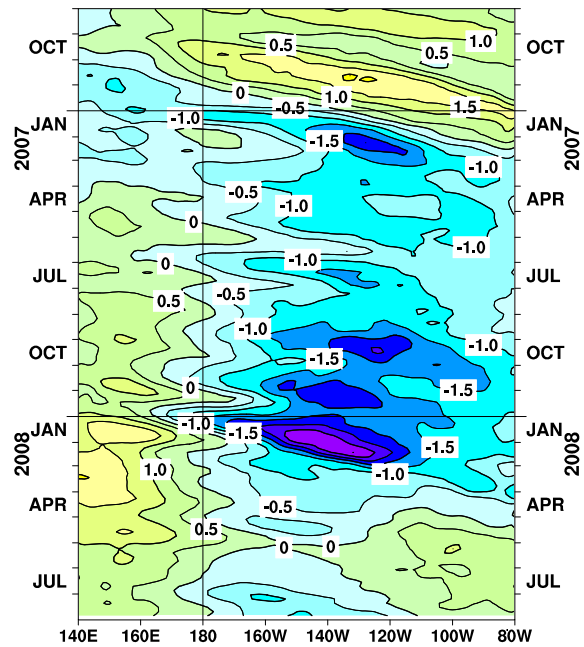


図5 太平洋の赤道に沿った海面から深度300mまでの平均水温平年偏差の経度-時間断面図(海洋データ同化システムによる)。等値線の間隔は $0.5^{\circ}\text{C}$ (平年値は1979~2004年の26年平均値)。

#### 4. 大気 ( 図 6 ~ 図 8 )

西部から中部にかけての大気下層は東風偏差

- 8月の太平洋赤道域の対流活動は、東経 125 度付近で平年より活発だった ( 図 6 )
- 8月の日付変更線付近の OLR 指数は対流不活発を示していた。中部太平洋の赤道東西風指数は、大気の上層では西風偏差、下層では東風偏差だった ( 図 7 )
- 赤道季節内振動の対流活動の活発な位相は、8月上旬にはインドネシア付近で見られ、中旬から下旬にかけては大西洋とインド洋で見られた。太平洋赤道域の大気下層では、8月を通じて西部から中部で東風偏差が見られ、東部で西風偏差が見られた ( 図 8 )

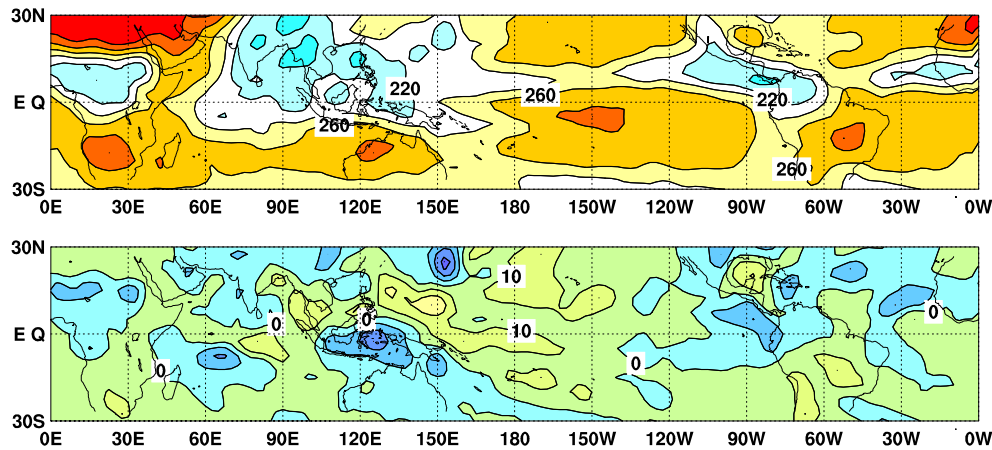


図 6 2008 年 8 月の外向き長波放射量 (OLR) ( 上 ) 及び平年偏差 ( 下 ) の分布図。OLR の値が小さいほど、対流活動が活発であることを示す。上図は  $20\text{W}/\text{m}^2$  毎、下図は  $10\text{W}/\text{m}^2$  毎に等値線を描いている ( 平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値 )。OLR データは米国海洋大気庁 ( NOAA ) から提供されたものである。

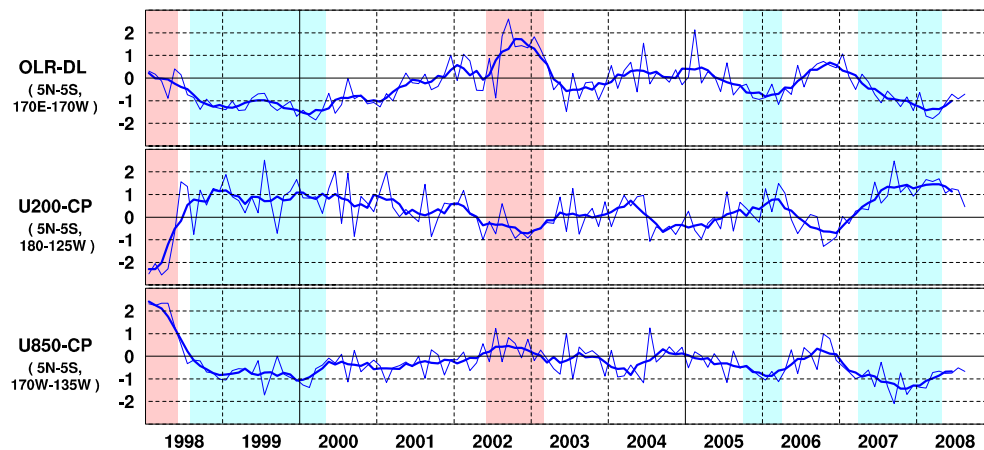


図 7 日付変更線付近の OLR 指数 ( OLR-DL )、対流圏上層 ( 200hPa ) の赤道東西風指数 ( U200-CP )、対流圏下層 ( 850hPa ) の赤道東西風指数 ( U850-CP ) の時系列 ( 上から順に )。折線は月平均値、滑らかな太線は 5 か月移動平均値を示す ( 平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値 )。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

赤道季節内振動：熱帯大気に見られる 30 ~ 60 日程度の周期の振動。対流活動の活発な領域が東進するのにあわせて東西風の変化も東に移動する。

OLR 指数：OLR から導いた上層雲量の指標の一つ。正 ( 負 ) の値は上層雲量が平年より多い ( 少ない ) 状態を示す。

赤道東西風指数：赤道付近の東西循環の指標の一つ。正 ( 負 ) の値は西風 ( 東風 ) 偏差であることを示す。

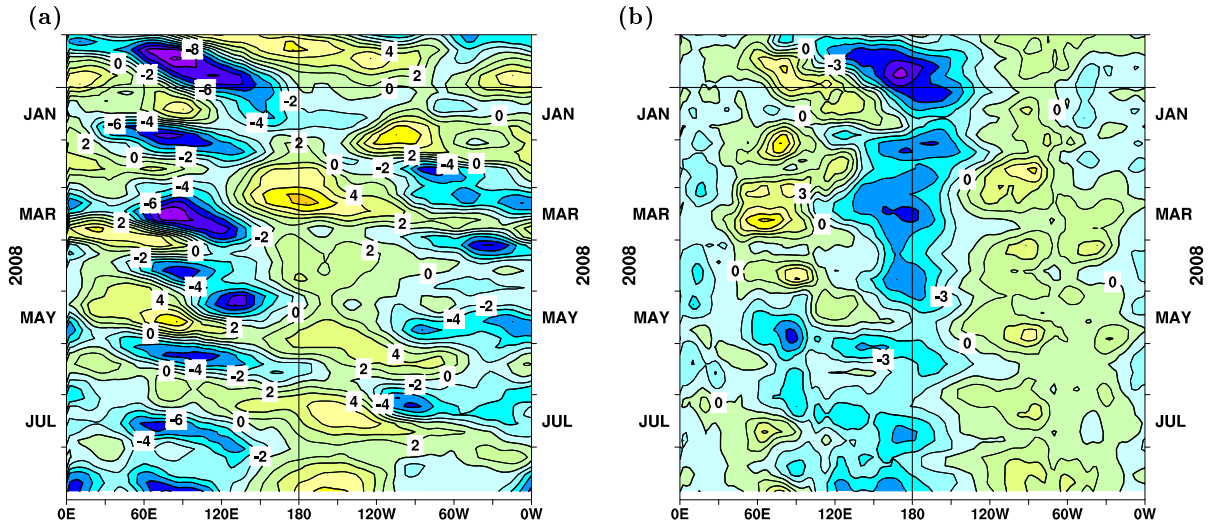


図8 赤道付近における対流圏上層(200hPa)の速度ポテンシャルの年平均偏差(a)及び対流圏下層(850hPa)の東西風速の年平均偏差(b)の経度-時間断面図。等値線の間隔は(a)が $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、(b)が $1.5 \text{ m/s}$ (両者の年平均値は1979年~2004年の26年平均値で、JRA-25長期再解析データを用いて算出)

### エルニーニョ予測モデルによる予測結果(2008年9月~2009年3月)

- エルニーニョ予測モデルは、エルニーニョ監視海域の海面水温が、予測期間中、基準値に近い値で推移すると予測している(図9)

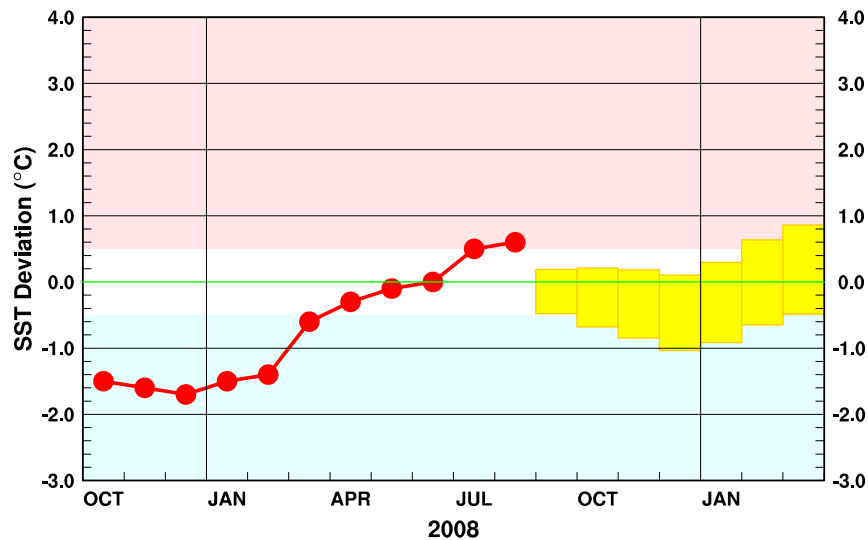


図9 エルニーニョ予測モデルによるエルニーニョ監視海域の海面水温予測。エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の先月までの推移(折れ線グラフ)と今後の予測(ボックス)を示す。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。(基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値)

エルニーニョ現象などの情報は気象庁ホームページでもご覧になれます。  
(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/elnino/index.html>)

来月の発表は、10月10日14時の予定です。  
内容に関する問い合わせ先：気候情報課  
(電話 03-3212-8341 内線 5134、5135)